



「おもしろくてためになる」歴史新書とは？（LINKを読む）

小林, 准士

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 14:181-185

(Issue Date)

2022-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481746>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481746>



「おもしろくてためになる」歴史新書とは？

小林 准士

『LINK』一三号では、特集として「歴史研究の隣人たち インタビュー・シリーズ2」が生まれ、第一部では講談社現代新書の編集者であった山崎比呂志氏、第二部では金沢の建築士やまだのり氏のインタビューがそれぞれ掲載されている。歴史研究者の手になる新書も手がけた編集者と、生まれなくなった町家を解体したり改修したりするまゑに、家の掃除をしたり家財道具を欲しい人に譲り渡したりする「いえおくり」という活動を行っている建築士を、「歴史研究の隣人」と位置づけた上での企画となっている。

また、インタビューの前後には古市晃氏（第一部）と市沢哲氏（第二部）による前書き、小山啓子氏（第一部）、井上舞氏（第二部）による参加記が掲載され、それらに加えて村井良介氏が「二つのインタビューに寄せて」という文章を寄稿している。

このうち村井氏の文章は、二つのインタビューにおけるトーン（論調）の違い

を指摘し、科学コミュニケーション論の知見を踏まえて考察したもので、インタビューを読んで考えをめぐらせるのに大いに役立つ内容であった。

さて、新書編集者であった山崎氏によれば、かつてと比べ現在では読者層が二極化し、新書が読まれなくなる傾向にあるとともに、新書の性格自体が変化し、毎月出版される四、五冊のうち一冊だけが「きちんとした教養もの、それ以外のものは大ヒットを狙うという役割分担」がなされているという。また、「おもしろくてためになる」という、エンターテインメントと教養を両立させようとしていた講談社の方針が、「今すぐためになる」という収益重視の志向に傾き、収益性と文化性のバランスが崩れてきているという。

このような山崎氏の発言を受けたインタビューアー側に現状に対する歎きが散見することに気づいた村井氏は、一般の人々（読者）を知識が欠如した存在とのみ捉えるのではなく、それぞれの生活の

文脈に沿って知識を有する人々と捉える、科学コミュニケーション論の知見を踏まえ、一般の人々の「文脈」を歴史研究者が編集者を介して理解するような回路に可能性を見出している。

町家や古民家に学術的な価値を見出しているわけではない人々が、ノスタルジックな雰囲気を愛好する志向から古い建築物に利用価値を見出していることを肯定的に捉える基調にある、第二部のインタビュートとの対比からなされた村井氏の指摘は鋭いもので、私なども第一部のインタビュールを読んだだけではインタビュールと同様の歎きの感情しか抱けなかったであろうところ、大いに蒙を啓かれた。

というわけで、著者または歴史研究者の文脈と、読者または一般の人々の文脈を区分することで、パブリック・ヒストリーの可能性について模索しようとする村井氏の視点を参考にして、もう少し第一部のインタビュールについて考えてみよう。

インタビュールでは、新書が専門家による教養書と非専門家による売れる本に分かれ、後者の比重が大きくなっていることに言及されていた。確かに現在では、岩波新書、中公新書、講談社現代新書の「教養新書御三家」以外にも、ちくま新書、平凡社新書、集英社新書、文春新書、新潮新書、NHK出版新書、光文社新書、扶桑社新書、PHP新書などなど、数々の新書が生まれ、後続の新書ほど売れる本の比重が高くなっている状況があり、新書全体で見ると、講談社現代新書の教養一対売れる本四、五という比率どころではないであろう。

このように新書の種類が多様化しているにもかかわらず、新書全体の売上額が長期的に低落傾向にあることは、出版社側にも認識されており、ごく最近になり、講談社も百頁程度の短い新書シリーズを発刊し、若者読者の獲得をめざすような動きも出てきている (<https://gendai.media/articles/-/98950>)。新書の読者層は中年以上の男性に偏っているとされ

ているためか、読者層の拡大は各社共通の課題でもあるようで、ちくまプリマー新書、ちくまQブックス、中公新書ラクレ、岩波ジュニア新書、岩波ジュニアスタートブックスなど、若年層向けのシリーズも次々に発刊されている。購読者が減少するなか、多様な読者を獲得することと何とか市場を維持しようとしているというのが現状であろう。「いわゆる概説書みたいな本が、次から次へとよく出ている」(小山氏の発言)のも、こういった事情によるのであろう。

但し、専門家の手になる教養書と非専門家による売れる本という対比が、歴史学の場合に必ずしも成り立たないことは、専門外のことにも踏み込む専門家による新書が多数出版されていることから明らかであろう。例えば、磯田道史氏、本郷和人氏らはそれぞれ近世史、中世史の歴史研究者であるが、自らの専門領域を超えたテーマの著作を複数の出版社から次々と刊行している。しかも彼らが意図的にそうした戦略をとっているであら

うことは、本郷氏が自らを「ヒストリカルコミュニケーター」と称していることから窺える (<https://adv.asahi.com/interview/11052050>)。また、磯田氏は『司馬遼太郎』で学ぶ日本史』(NHK出版新書)など、歴史小説好きな読者に向けた史論を新書で出すなど、まさに一般の人々の「文脈」を強く意識した書き手となっている。彼らの著作は、おそらく歴史小説や大河ドラマが好きな人々など、読み物として歴史書を楽しむという読者を幅広く獲得することで「売れる本」となっているのだ、短い間にこれほど多く出版されているのであろう。

しかし、教養新書の愛読者が開設しているブログとして有名な「山下ゆの新書ランキング」(<http://blog.livedoor.jp/yamasiayu/>)で過去記事を検索すると、磯田道史氏の著作は一冊もヒットせず、本郷和人氏の著作も『天皇はなぜ生き残ったか』(新潮新書)しか読まれていない。その代わり歴史学関係の新書としてはその道の専門家による著作が多く読

まれていることが確認できる。山下ゆ氏は社会科教員で研究者ではないが、読書量の多さから教養新書の本格的な読み手だと考えられる。とすれば、山下氏にスルーされがちな磯田氏、本郷氏は、新書における「売れる本」市場の拡大という潮流に乗った書き手であると言うことになるのか。

この見方が妥当かどうかはさておき、磯田・本郷両氏が、専門家による教養書／非専門家による売れる本という図式に収まらない存在であることは間違いない。く、「教養」新書の読者層以外の「文脈」もつかみ、新書の読者層を拡大した功績は認められよう。但し歴史研究者としては、十分に先行研究を把握していない分野にも踏み込むことで、専門家からは批判を浴びるリスクを冒していることは否めない。

日本近代史の研究者で中公新書の『民衆暴力』を書いた藤野裕子氏は、同書で近世まで遡って叙述を始めているが、日本近世史研究者の岩城卓二氏や日朝関

係史を専門とする宮本正明氏に原稿のチェックを受けたことを、あとがきで明かしている。「越境」に伴うリスクを自覚した慎重な振る舞いと言えよう。しかし著作を量産している磯田・本郷両氏がこのようなことを心がけているようには見えない。したがって、難解で専門的な学術書にはなかなか興味が持てない、一般の読者の文脈に沿うかたちで専門的な知を伝えていこうとする試みは重要であるが、読者の興味関心に沿って分かりやすく面白く伝えることと、研究状況を踏まえて専門知を正確に伝えることのバランスの取り方は、やはり難しいということになりそうである。

この点はインタビューの中で山崎氏が「おもしろくてためになる」ことを求めて、教養書の書き手となる歴史研究者に「大きなヴィジョン」「網野さんレベルの歴史観」「学説のオリジナル性」の提示を迫っていることと関係してこよう。「学問的な正当性は担保したうえで、厳密なレベルでは言えないところまで大胆に踏

み込んで書いてください」とお願いすることはよくあるとも、氏は述べる。しかし、こうした「踏み込み」には慎重にならざるをえない歴史研究者の多いことが容易に想像され、そもそも歴史観を提示する力量を自負できる研究者は少ないかもしれない。

第一部のインタビューへの参加記を書いている小山啓子氏が、大学院生としてフランス近世の手稿文書をもとに博士論文を書いて帰国し職を得た途端、「日本の西洋史」の教育者として社会貢献が期待されたという経験を踏まえ指摘した、研究の世界と教育の現場のギャップは、まさに右の状況に当てはまるものであろう。歴史学の場合、個別具体的な内容に即した論文ではなく、大学で概説の授業を行う場合や、全体的な歴史叙述を目的とした書籍を執筆する場合には、できるだけ幅広い分野の先行研究を把握しそれらを総合しなければ、講義の組み立てや文章の執筆はできないが、そうした力量は一朝一夕には身につかないからで

ある。しかも専門領域を超える部分についても独自の観点に基づいて系統立てた歴史叙述を行うのはさらにハードルが高い。

このため通史的な歴史叙述を求められる場合には、自治体史などによく見られるように、時期や分野を細かく区切って分担執筆するという方法が用いられることが多い。実際、筆者も『松江市史』など自治体史の編集と執筆を経験し、幅広い分野を扱う自治体史を一人あるいは少数人数で執筆することは難しいと痛感している。しかし、執筆分担を細かくしてしまうと、様々な分野、事象を関連づけ総合したかたちでその地域の特性を叙述することが難しくなるといふ弊害も出てくる。

自治体史以外では、小学館、集英社、講談社などの『日本の歴史』シリーズが総合的な歴史叙述を読むことのできる媒体であるが、編集や執筆の機会が大御所クラスの研究者に限られるので、比較的若い研究者が自らの狭い専門領域をこえ

た歴史叙述を経験する場とはなりにくい。これに対しコンパクトで自由なテーマ設定が許される新書という媒体は、総合的な歴史叙述の修練の場としては適しているように思われる。

こうした観点から注目される近年の出版企画は、ちくま新書の『〇〇史講義』シリーズであろう。例えば、佐藤信氏編の『古代史講義——邪馬台国から平安時代まで』（二〇一八年刊）は第1講から第15講までの一五のテーマを立て、一五人で執筆している。多人数による分担執筆のため、本全体で特定の独自の歴史観を提示することはできていないが、概説的な側面と研究史を踏まえた論点提起的な側面を合わせもち、文献案内もあつて入門書として受け入れられやすい形態となつている（なお、文献案内は岩波新書でも近刊では付されるようになっていく）。

このシリーズは、編者の佐藤氏によれば、研究の個別細分化を避けるとともに、「史料にもとづかない思いつきや奇抜な

推測から面白おかしい歴史像を提示しようとする出版企画」からも距離を置いた試みとして企画されたようである（同書一〇〇～一〇一頁）。このように個々の執筆者と出版社の編集部とのあいだに経験豊かな専門的な研究者が介在するというやり方は、個別分野における専門的な正確さの追求と総合的知見の提示の両立を図る一つの方法かもしれない。

一方、歴史研究者が一般読者の興味関心の在りかや「文脈」をどのようにして掴むかという問題については、編集者の役割とともに、読者と執筆者が直接繋がる機会の確保という、インタビュー中でも話題になった点がやはり重要であろう。実際、インタビューで取り上げられていた講座やYoutube 配信、SNS を使った発信については、すでにそうした試みがなされつつある。例えば、先ほども触れた『民衆暴力』を執筆した藤野裕子氏は、ツイキャスというライブ配信サービスを使って「真夜中の補講」(<https://twicasting.tv/fujimoyuko/>)と

いう名称のサイトを開設し、自著の読書と交流したり学術書の著者にインタビューしたりしている。LINK のインタビューと同様なかたちで、藤野氏が中公新書の編集者にインタビューした際には筆者も拝聴した。このようなことを行うにはラジオのパーソナリティのような能力が必要であり、誰もができる試みではないかもしれないが、読者の生の声を聞くという試みとしては究極的な形態であろう。

藤野氏のようにツイキャスまでしなくとも、SNS や山下ゆ氏のブログ（山下氏の「文脈」については「B 面の岩波新書」でのインタビューが参考となる。<https://www.iwanamishinsho80.com/post/zaia7>）などのような、読者自身が発信するメディアを把握することで、歴史研究者が一般読者の「文脈」を把握することは従前よりも容易になっているのではないだろうか。

というわけで、本特集のインタビューを読み、現在に生きる一般の人々の「文

脈」を理解すること、根拠のないホラを吹くのとでは違ったかたちで、歴史学の専門的知見を分かりやすく面白く伝えるという目標の重要性を、改めて認識した次第である。

（追記）

脱稿後、LINK 一三号のインタビューと本稿の内容に関わるインタビューが『歴史評論』第八七一号（二〇二二年一月）に「新書」の中の「歴史学」（松田健、《聞き手》宮瀧交二）として掲載されているので、合わせて参照していただければ幸いである。